

意志決定ツール「見通しの輪」を活用した「学びの共同体づくり」 —地域環境学習から学年学級活動への発展を通して—

霞ヶ浦町立南中学校

川島 則夫

序

現在、地球環境が大きな社会問題となっている。文部省は、将来の地球環境を考えたとき学校の中で環境教育を行うことが急務であると位置づけ、『環境教育指導資料(中学校・高等学校編)』(1991年)、『環境教育指導資料(事例編)』(1995年)等を発行し、学校教育における環境教育の取り組みの方向と具体的事例を示した¹⁾。これを受けて茨城県でも、平成5年度より3ヶ年にわたり、環境意識の高揚を図る目的で環境教育実践校を指定するとともに、県内の全小中高等学校に「環境フォーラム」の開催を提案するなど、環境教育の拡充のための様々な政策を打ち出してきた。この一環で霞ヶ浦町立南中学校(以下、「本校」と略記)は、平成5年度より「霞ヶ浦周辺の水環境の保全」を題材とした地域環境学習に取り組んできた²⁾。

ところで、こうした環境学習に取り組む以前の平成3年当時、本校の生徒たちの学校生活は、望ましい状況ばかりではなかった。すなわち、全国大会などに出場し活躍する運動部の生き生きとした生徒も目立っていたが、反面、何に力を注いだらいいのか分からず、自分の持つ有り余るパワーをうまく制御できずに、反社会的行動に出る生徒もいたし、あるいは無目的の長期欠席を繰り返す生徒も少なからず存在した。また、自分をうまく表現できないためか、生徒同士が人間関係をうまく築くことができず、クラス全体の活動は低調で不活発であった。さらに、生徒同士がテストの得点により序列化され、とりわけテストで低い得点しかとれない生徒の活動意欲は、全くといってよいほど育成されない傾向にあったし、むしろ活動意欲は低下気味であった。このような状況を反映してか、生徒同士、生徒と教師との間でもトラブルが見られた。しかしこうした状況は、本校ばかりではなく、全国の中学校でも、あるいは高等学校ないし小学校ですら見られるものであった。こういう状況の改善が全国的に求められてきたのは周知のとおりである。生徒たちにとって学校生活が生き生きとしたものとなり、生徒ばかりか教師にとっても学校が活性化し、望ましい「学び」の成立が今まさに求められているのである³⁾。

さて、全国的に見れば環境教育への取り組みはますます充実したものになりつつある。例えば、日本児童教育振興財団は、1992年より「全国小学校・中学校環境教育賞」を設け、全国の優れた環境教育の実践を顕彰してきた⁴⁾。しかしそこでの実践は、当然のことではあるが、環境教育の充実を目指したもので、環境の改善やそれへの取り組みの議論に終始している。しかし、先程のような学校をめぐる状況にも目を向ければ、環境教育もそれ自体の枠内に終始してはならないのではないか。学校教育の活性化や充実した「学び」一般の成立にも寄与する必要があるのではないだろうか。

「霞ヶ浦周辺の水環境の保全」を題材とした地域環境学習に取り組んできた本校の実践は、環境学習の充実ばかりではなく、そうした点でも現在の学校教育をめぐる状況の改善に寄与するもので

あった。後述する「見通しの輪」等を導入した一連の地域環境学習が、生徒の環境意識や行動様式ばかりでなく、生徒一人ひとりや学級集団にも変容をもたらし、上述のような現在の学校教育の問題状況の多くを緩和ないし改善したのである。

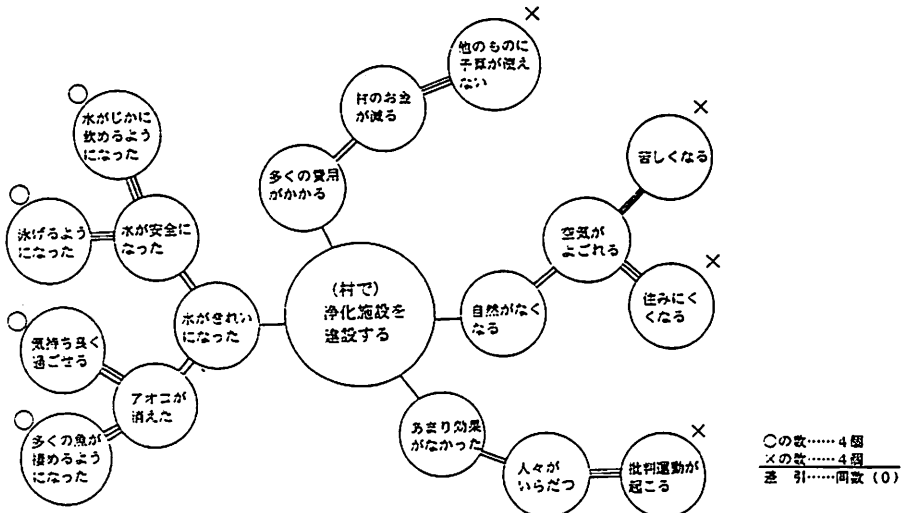
そこで小論では、「見通しの輪」の導入を中心にした本校の環境学習の実践を取り上げ、これに即して、こうした変容の具体的な様子を詳述し、環境学習による充実した「学び」の創造、学校教育の活性化について論じることにした。

1. 意思決定ツールとしての「見通しの輪 (Futures Wheel)」とその改善

「見通しの輪」については、「カリキュラム 4～8 学年」(アメリカの酸性雨財団)において次のように規定されている。「『見通しの輪』は、ある決定が将来もたらす影響について考える効果的なツールで、意思決定活動をするのに有効である。」具体的には、「社会的問題および課題を徹底的に調べた後で、クラスを4、5人のグループに分け、それぞれのグループに解決への『ふさわしい』と思う解決案を提案させ、その解決案から結果的に生じると思われることがらを話し合っていく、最終的に最初の解決案が社会全体にどのように影響を及ぼすかを予想し、意思決定をするためのツールである。」とつけ加えられている⁵⁾。本校で「見通しの輪」を活用するきっかけになったのは、このツールが話し合い活動に重点を置いて将来を十分予測しながら意思決定を行うからである。

霞ヶ浦浄化の解決策の一つとして生徒たちから提案された「浄化施設を建設する」を例にして「見通しの輪」について説明していこう。

図1 「見通しの輪」(浄化施設を建設する)改善前



①白い模造紙の中央に円(赤色、直径20cm)を描き、グループで選んだ解決案「浄化施設を建設する」を記入する。

②解決案が実行された場合、結果的にどんなことが起こるか、起こると考えられること「水がきれいになった」を中央の円(赤色)の周りに記入し、円(赤色以外の色、ここでは青色、直径10cm)で囲む。そして、この円と中央の円(赤色)とを一重線で結ぶ。これが解決案との第一次の関係で

ある。この時、起こると考えられる良いことや悪いことが2～3項目程度記入できると最良である。このことは、第二、三次の影響についても同様である。

③第一次の影響「水がきれいになった」が実現されたならば、結果的にどんなことが起こるか、次に起こると考えられること「アオコが消えた」を第二次の影響の円（青色）で囲む。この円（青色）と「水がきれいになった」の円（青色）とを二重線で結ぶ。これらが解決策との二次的関係である。

④第二次の影響と同様の操作を行う。ここで起こると考えられた「多くの魚が棲めるようになる」の円（青色）と「アオコが消えた」の円（青色）とを三重線で結ぶ。

⑤第三次の影響について、それが良い影響か悪い影響かを検討し、良い場合には「○」、悪い場合には「×」、どちらでもない場合には「△」を最も外側の各円（青色）のそばに記入（赤色）する。

例えば、

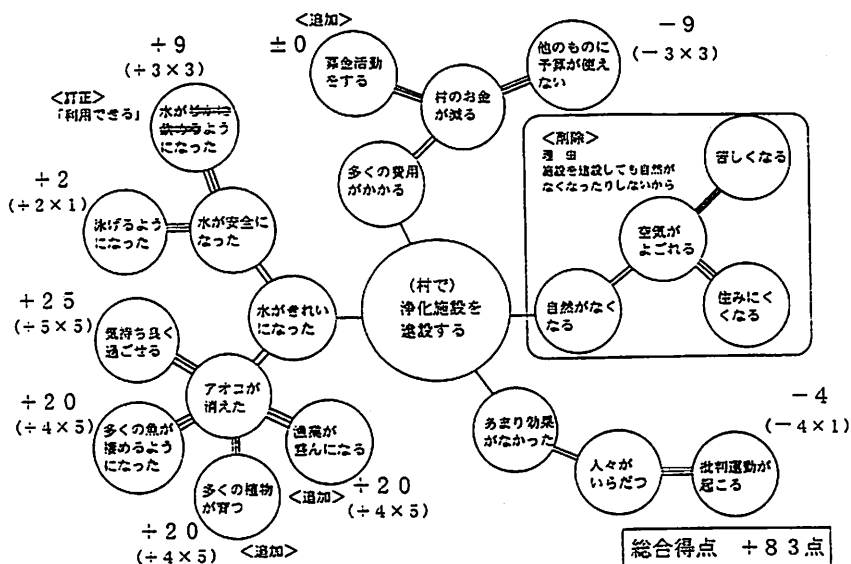
- ・「多くの魚が棲めるようになる」……○
- ・「住みにくくなる」……………×

となる。

⑥○と×の印を数え、どちらがいくつ多いかを求め、白色模造紙の右下に記入（黒色）する。解決案「浄化施設を建設する」の場合、○…4つ、×…4つで同数になり、良い点もあるが問題点もあり、善し悪しの評価はしにくい結果となった。解決案は、○が多い場合は「適」とし、×が多い場合には基本的に「不適」とする。

⑦各グループで各解決案についての「見通しの輪」を作成し、その結果をクラスで発表していくことになるが、その後、作成した「見通しの輪」についての不備な点が生徒側より指摘された。第一点は、第一、二、三次それぞれの影響として示されたものが妥当かどうかという点であった。「浄化施設を設置した」ぐらいで、「自然がなくなる」という影響は妥当性に欠けるのではないかということである。第二点は、○、×を用いた第三次の影響及び解決案の評価の方法が、これで妥当かどうかという点であった。具体的には、第一、二、三次のそれぞれの影響が起こると考えられる確率が異なること。また、各種の○（または×）毎に、良さ（悪さ）の程度が違うことなどであった。

図2 「見通しの輪」(浄化施設を建設する)改善後



⑧これらを考慮し「見通しの輪」の修正をすることにした。「浄化施設を設置した」ことにより「自然がなくなる」可能性はとても低いということより、第一次の影響「自然がなくなる」以下の各影響を削除した。それとは逆に、第二次の影響「村のお金がへる」に第三次の影響「募金活動をする」、同様に「アオコが消えた」に「多くの植物が育つ」と「漁業が盛んになる」を追加し、さらに、第三次の影響「水がじかに飲めるようになった」を「水が利用できる」と訂正した。

⑨さらに生徒の発案により、第三次の影響それぞれについて、重み付けをした。

<重み付けの方法>

ア. 良さ, 悪さの程度

○→良さの程度……+1~+5

×→悪さの程度……-1~+5

△→どちらでもない…0

イ. 起こる確率(見込み)

……1~5(中学校の学習評定と同様に考えた)

ウ. 重み付けを加味した評価

第三次の影響の評価=良さ, 悪さの程度(見積もり)×起こる確率(見込み)

例えば, 第三次の影響「多くの魚が棲めるようになる」についての評価は,

良さの程度……+4

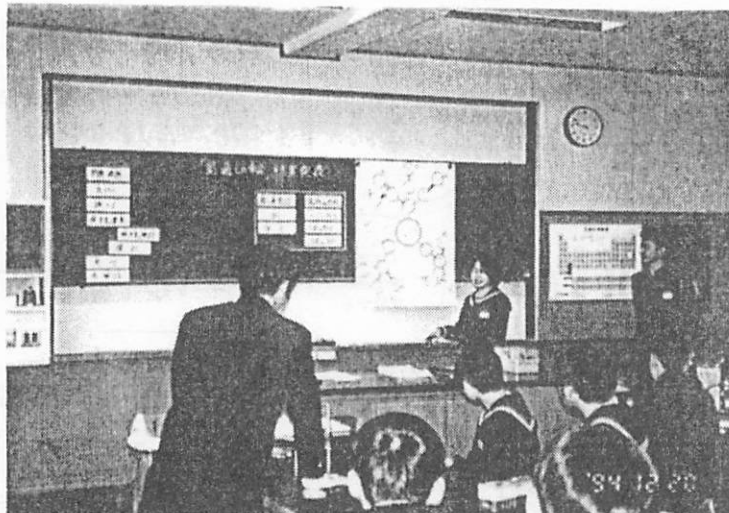
起こる確率……5

よって, $+4 \times 5 = +20$ となった。

この評価結果を小さな用紙に記入し, 第三次の影響の円(青色)のそばに添付した。

⑩各第三次の影響の点数を合計して, 解決案の評価の目安とした。仮に, 総合点数がプラスの数であれば, この解決案が社会全体に肯定的な影響を及ぼし, だから採用されるべきである, ということを示すものである。もしその総点数がマイナスであれば, 別の解決案が検討されるべきであることを示すものである。さて, 解決案「浄化施設を建設した」の第三次の影響の評価結果は, +83点となり, この解決案は, 社会全体に肯定的な影響を及ぼし, 採用されるべきであるという結果になった。将来が良くならなければ, 良い解決案とは言えないのである。

写真1 「見通しの輪」の結果発表



2. 「見通しの輪」の導入計画から実践

「霞ヶ浦周辺の水環境の保全」を題材とした地域環境学習の取り組みは、霞ヶ浦周辺の水環境にかかわる諸問題の実態調査を学校外にまで広げ、報告書にまとめ、その結果を発表し合い情報の共有化を図るものであった。その成果として、確かに本校生徒の環境意識が高まった。しかし、解決策が調査結果に基づく提案には至らなかったり、次年度の地域環境学習の継続意欲も十分とは言えないものであった。

そこで、このような課題を改善するきっかけとして、意思決定を中心に据えた前述の「見通しの輪」を導入した。

表1 霞ヶ浦南中地域環境学習プログラムの概要

<p>第1学年……問題への関心の喚起、認識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水環境調査（報告書作成、クラス・学年発表会） ・汚染地図の作成
<p>第2学年……解決策の提案</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水環境再調査（報告書作成、クラス・学年・学校発表会） ・意思決定指導プログラムの実践 ・家庭での正月のゴミ問題の解決策の提案と実践 ・解決策の提案・試行
<p>第3学年……行動とその評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・解決策の具体的行動・評価 ・世界潮沼会議の発表 ・後輩へのメッセージ作成 ・その他

表2 意思決定指導プログラムの概要（計20時間）

No	内 容	時 間	実施形態
1	意思決定過程把握	2時間	一斉
2	解決案の提案 「意思決定マトリックス」 (1)汚染マップ作成 (2)意思決定マトリックスの作成 (3)意思決定マトリックスの結果発表 (4)提案された解決案についてのまとめ	8時間	グループ グループ 一斉 一斉
3 ※	解決案の検討 「見通しの輪」 (1)検討解決案の選択 (2)「見通しの輪」の作成 (3)「見通しの輪」の結果発表 (4)「見通しの輪」の検討と改善	6時間	一斉 グループ 一斉 グループ・一斉
4	解決案の選択と試行計画立案	2時間	グループ
5	試行	随時	グループ

平成6年12月に筆者の担当する2年生1クラス34名が9グループ（3～4名，男女混合）に分かれ「見通しの輪」を活用した特別授業を行った。「見通しの輪」のプログラムは，表1の全体計画の中の意思決定指導プログラムの実践の中にあり，それは，表2のNO.3に示してある。

生徒たちが「見通しの輪」を利用する目標は，「各解決案（表3）を検討し，クラスとしてできる解決策を選ぶこと」とした。どのような手順で「見通しの輪」を活用し，解決案を検討及び評価していったか順を追って述べることにする。

3-(1)検討解決案の選択（以下，表2の「意思決定指導プログラムの概要（計20時間）」に示されるNo記号を用いて述べることにする。）

①グループ編成と調査結果報告

これまでの活動と同様に，学習形態はグループでの協同学習をするようにした。同一グループに夏の調査活動をしたメンバーと同じメンバーが集まらないように編成し，その後それぞれの調査結果を基にグループ別に報告会を行い，情報の共有化を図った。

そして，既に提案された解決案の中から，各グループ1つずつ選び検討することにした。

表3 提案された解決案（上位9つ）

No	解 決 案
1	リサイクル活動を行う
2	クリーン作戦を行う
3	むやみにゴミを棄てない
4	汚染防止PRをする（してもらう）
5	村で浄化施設を設置する（してもらう）
6	各家庭に浄化施設を設置する（してもらう）
7	農薬の使用を減らす（してもらう）
8	養殖鯉に過剰に餌をやらないようにする（してもらう）
9	アオコを肥料にする工場を設置する（してもらう）

3-(2)「見通しの輪」の作成

①「見通しの輪」の説明と練習

「見通しの輪」がどんなものであるかを生徒に紹介するにあたり，身近で興味のある内容として，課題「長電話をして困る」－解決案「家の電話を公衆電話にした」を取り上げた。これは，当時，クラス内で男女交際にかかわる問題が起こり，保護者からも長電話の相談が多かったためである。そこで，この問題に対して筆者側で「見通しの輪」をTPシートとプリントに表し説明した。これは，生徒たちにとって身近な課題であったため，「見通しの輪」の活用方法がスムーズに理解できたようだ。

さて、生徒たち自身がはじめて「見通しの輪」を作成するにあたっての課題は、話し合いが楽しくスムーズに成立するように「好きな人ができ悩んでいる」という課題にし、その解決案も「電話で告白した」とにした。作成が始まると、普段、勉強無関係という生徒ほど積極的に話し、それをみんなが自分のことのように真剣に聞く、という自由な意見交換が行われた。その後、その結果の発表は、興味本位の発表にならないよう発表方法についてのプリントを用意し、その方法に準じるようにした。課題が、それぞれの生徒の興味をそそる話題に関連したものであったため、発表者も聞く生徒も真剣であった。特に、発表する生徒は、緊張しながらも達成感を感じる発表になった。

②「見通しの輪」の作成手順

話し合いを活発にさせるために、用紙(A3版)に下書きした後、見た目に分かりやすく工夫した「見通しの輪」を模造紙に消書きさせたようにした。そして、作成した「見通しの輪」の結果を基に、解決案の良い点や問題点、さらには総合的な評価を各班で話し合い、解決策としてふさわしいかどうかを検討させた。

3-(3)「見通しの輪」の結果発表

生徒の司会により、各グループ7分の持ち時間(発表4分、質疑応答3分)で発表会を行った。発表方法のプリントを準備し、解決案の良い点や問題点、総合的な評価、そして解決策としてふさわしいかどうかについても分かりやすい発表を心がけるように助言した。また、疑問点や不明な点などは曖昧にしないで質問するように指導した。どのグループもこの質疑の時間をスムーズに切り抜けたくて、事前打ち合わせを十分行い発表に臨んだ。

3-(4)「見通しの輪」の検討改善

①「見通しの輪」の修正

各グループの「見通しの輪」の結果について、他のグループが批評する時間を設けた。各グループの「見通しの輪」の下書きコピーに、他グループから「見通しの輪」の結果について「重要な点」「問題点」「現実に可能性の高いもの」などについての指摘を、その理由及び意見等を加えて記入してもらうようにした。そして、他グループからの批評を受け、その意見を参考に改善するようにした。また、「見通しの輪」の不足は追加し、「見通しの輪」の不要は削除することにした。

②「見通しの輪」の結果の重み付け

これまでの活動をしてきて、第三次の影響の重みに違いがあるのではないかという点が指摘された。それは、「起こってくる影響がとても重大なものとそうでもないものがあり、同じようには扱えないのではないか。」という内容であった。筆者の考えとしては、中学生には、重み付けまではできないのではないかと考えていたので、この意見には驚いた。そこで、どのように重み付けの方法を理解させるかが課題になったが、ある生徒から「数学で学んだ二次関数のように、○の2乗、3乗もありえるのではないですか。」という考えが出された。この発言をきっかけに、生徒たちは重み付けの方法を簡単に理解した。

③重み付けの結果発表

生徒の司会により、各グループ2分の持ち時間の中で、「修正点、重み付けの結果、最終的な解決案の良し悪し、選択すべきかどうか(評価結果)」を簡単に発表させた。

4 解決案の選択と試行計画立案

「見通しの輪」の結果を基に、9つの解決案の中から解決策としてクラスで実行していいものを各班で選択させた。その数は、1つでもそれ以上でも可とした。グループでの話し合いがうまく進むように、各グループの「見通しの輪」を総合点の順に並べて教室の側面に掲示した。また、黒板には表6のような解決策提案の集計表を掲示して、各グループに解決策として良いものを選び記入させるようにした。その後、表に記入したことを基に各グループが選択した解決策とその選択理由をきちんと発表させるようにした。

表4 解決策提案集計表

グループ	解決案・得点	ゴミを捨てない	浄化施設	浄化槽設置	クリーン作戦	魚の餌の減少	リサイクル	汚染防止PR	肥料工場設置	農薬使用減少
		+89	+83	+75	+75	+40	+5	-6	-11	-19
1	○	○								
2			○	○		○				
3					○					
4	○	○	○	○						
5	○				○					
6				○	○					
7	○				○		○	○		
8					○					
9	○				○					
合計		5	3	3	7	1	1	1	0	0

その後、クラス全体としての話し合いを持ち、クラスとしての実現可能な解決策「クリーン作戦」を導き出した。これが、「年末のゴミ拾い」をするきっかけになり、平成8年度の「ボランティア活動」に、そして、平成9年度の2・3学年合同の「ボランティア活動」に発展していった。

ところで、この解決策は、最も高得点の解決策ではなかったところが興味深い点であった。

5 試行

「霞ヶ浦周辺の水環境の保全」のための具体的な行動を行うために、行動を共にするもの同士でグループの再編成を行い、試行計画を立て春休みに随時試行することにした。

3. 「見通しの輪」を中心にした地域環境学習による生徒の変容

これまでの実践を通して、生徒たちに変化が表れた。それは多様でうまく表現できないけれど、その主だった変化を述べることにする。

(1) 個々の生徒の変容

① 発表に自信を持ったF男とM子

F男は、テストの成績は上位であるが、自分がうまく表現できない内気で話し下手な生徒である。そのF男が「見通しの輪」の結果発表時にとっても明瞭な発表を行い、クラス中から大きな拍手と歓声があき起こった。F男は、照れながら満足そうに自分の席に戻った。授業が終わり、「素晴らしい発表だったね。良くこんな原稿を考えたね。」と言うと、「はくが、考えたんじゃないありません」という答えが返ってきた。実は、そのグループには役割分担があり、発表する人と原稿を作る人に分かれていたのである。原稿を作ったのは、小さいときから人前で話すのが苦手という口数の少ないM子だと知った。そこで、M子に原稿がとっても素晴らしかったことを伝え、賞賛すると共に発表の積み重ねをする勇気を持つことを助言した。その後、その二人は少しずつ発表を試みるようになり、F男は他の授業を含めた生活面で少しずつ積極的に自分を出すようになり、M子は世界湖沼会議の壇上で原稿なしの発表をすることができた。現在高2になった今、ニュースキャスターになりたいと猛勉強中である。

② 重み付けを思いついたM男

ちょっと自分に自信のあるM男は、クラスのリーダー的存在であった。第2章でも述べた「見通しの輪」の改善点が出され、重み付けをどうするかが問題になった授業のとき、M男は、「良い面にも悪い面にも○や×の2乗、3乗という表現方法があるんじゃないですか」と数日前の数学での学習「二次関数、 $Y = X^2$ 」から思いついたことをみんなに話した。すると、級友たちは容易に重み付けを理解した。

その後、M男は、自分の考えが級友に役に立ったことに気をよくし、さらに勉強にクラスへの貢献に努力していった。

③ ティッシュを配るO子とN子

それぞれの生徒は、中学3年の地域環境学習の中で行う具体的な行動として、グループ毎にインタビューやアンケート調査等を自主的にやるようになった。O子とN子は同じ小学校出身でいつでも二人で行動するおとなしい自信のない生徒である。その二人が、人が大勢集まる役所と大きな地元スーパーの前で、水質浄化を訴えた自作のプリントとティッシュを配ったという報告を受けた。彼女たち自身は、自分たちの行動を思い切ったことをやったと感心していたが、筆者自身もよくここまでやったと感心した。その後は、教室の中で二人で行動することは今までと同じでも自信を持って行動しているように感じてきた。そして、しっかり自分の意見を言うようになり、他クラスの別の仲間にもいろいろなことをアドバイスしている光景を多く見るようになった。

④ イラストを認められたK子

K子は、周りのことを良く考え、みんなと楽しく語らいながら学習やその他の活動を一生懸命やった生徒である。自分の得意なイラストを上手につかいてそれぞれの単元のまとめをしたり、発表のための原稿を作ったりした。そのきっかけは、1年生の頃の授業で禁止されていたちょっとしたノートへのいたずら描きだが、自分の良い点として発見されプラスの方向へ発展した例である。地域環境学習の中で、イラストを描く毎にクラスから認められ、それが励みになり自信を持って活動でき

るようになったのである。受験間近、卒業文集のクラスページをみんなから任された喜びがいつまでも大きな自信として残っているようである。高校の2年生になる今では、イラストに関してクラスメートからの承認がなく、とても残念に思っているようだが、将来の目標をしっかりと決め一生懸命学習に励んでいる。

(2) クラスの変容

日が続つにつれて、クラスの生徒相互の距離が近づいてきたようだ。生徒間、生徒・教師間のすれ違いがあまり感じなくなってきたことに気づく。相手の立場に立って物事を考えるようになってきたのかとも思う。同時に、筆者も生徒の立場になって考えるようになってきた気がする。

① 学習やクラス生活が自主的・協力的にできるようになった。

クラス全体が学習を自分たちで進めるようになった。例えば、筆者の担当する理科の場合、グループ学習を多く取り入れているが、生徒自らが学習課題を自分の問題として受けとめ、「見通しの輪」の時と同様、相談しながら自主的・協力的に学習するようになった。本実践のために時間がさかれたため、理科の授業時数が他のクラスより少なくなったが、テストの平均点数は他クラスに劣ることはなく、授業が今まで以上に活発に進んだ。

また、男女間の会話が多くなり、互いに相手を信頼する雰囲気になった。それが給食の準備に表れた。男子体育の終了が遅れたときに、女子が男子の分を快く用意することがあった。その後、逆に女子の終了が遅れたときには、男子全員で女子の分を用意するようになり、それが当たり前になってきた。

② グループ編成での不満なし

授業時のグループ編成において、生徒主体にグループを編成させると、以前のような男女別の編成とは異なり男女混合のグループを作るようになってきた。その中で、全体を調整する生徒が数名出てくるようになり、不満が出ないよう全体のバランスを良く考え調整してくれるようになった。

ちなみに、中学二年生を担当するときにもいつも苦慮することは、グループ作りである。グループ学習の目的の中心は、学習活動が成立し、スムーズに学習目標が達成できることにある。しかし、グループの中には、わざとその活動に参加しないわがままな生徒がいる。それは、特に女子生徒に多く見られた。そこで、グループ編成の前に、次のような話をするよう試みた。

「社会に出て、好きな人とばかり仕事をするとはそう多くない。案外、いやだなと思う人とすることの方が多い。そんな中で自分の選んだ仕事をやらないわけには行かない。一生懸命やりそれなりの成果を上げなければならないんじゃないの。今は、その時のためのトレーニングでもあるんだよ。中学生からそれをしてきた人とそれに気づかない人とは、その時どれだけの違いがあるか分からないじゃないの。」

不思議なもので、この話をするようになってからグループ編成についての不満はなくなった。教師サイドでグループ編成をすることもあるが、生徒に任せることが多くなった。そんな中、生徒たちは、新しいグループ編成をする度に少しずつ人間関係を広げていったようだ。

しかし、そうした中にも次の課題がでてきた。それは、「役割がいつも同じになってしまい、つまらないから、グループは先生に作ってもらいたい」というものである。良く聞いてみると、いろいろなことに挑戦したくなったのに生徒主体のグループ編成は、思い切ってそれができる人間関係を形成するには不十分になっていたのである。

③合唱コンクールでの最優秀賞受賞

本校の合唱コンクールは、学級のまとまりを競う最も関心のある行事である。そして、この行事の優劣は男子の協力によることが多い。そこで、女子全員は、少し頑張ってもらいたい男子生徒に励ましをすることになった。誰が誰に電話するかも十分考えた上でのことである。このような根回しの結果、見事、学年最優秀賞を手にすることができた。このようなことを経る度に、男女の仲がよりスムーズになった。ここに出来上がった男女の信頼関係は、中学生が引き起こす問題のプレーキ役として十分役に立ったのではないかと考えられる。

(3)クラス解散後の最終学年全体の変容

①クリーン作戦の実施（提案，協力）

受験間近の中学3年の12月、生徒主体によるクリーン作戦を行った。この行事は、一人の生徒が「南中の周りには、いろいろなゴミが多く、きれいにしたい」との理由から、「南中周辺のゴミ拾い」の計画案を担任に申し出てきたことから始まった。そこで、担任はその案の実現化に向け学年・学校に回り、賛同者を募って実施することになった。その結果、校長を始めとする教師6名と約30名の生徒がその活動に参加した。その発案者は、その主旨と活動方法及び内容を話し、約2時間の活動のリーダーとして全体の指揮をとった。収集後、分別されたゴミをそれぞれ計量器で計り、今までの研究の一つにつけ加えた。この活動は、生徒の提案が実際に実現できるという生徒たちにとって希望の持てる行事になった良い例であると思う。その後、この活動が後輩に受け継がれた。平成9年6月20日の本校創立記念日に2、3学年合同のクリーン作戦が実施され、288名中236名の生徒が自主的にゴミ拾いを行った。

②「後輩へのメッセージ」づくり

自分たちが3年間やり続けてきた地域環境学習を後輩に伝えたいという提案が生徒から出された。一生懸命作り上げてきた本校の特徴を今後も引き続き広げていってもらいたい。そして、高校生になって遊びに来たときに後輩にアドバイスをしたいというのである。そこで、その仲間数人との検討の結果、全生徒の承諾を得て、「後輩へのメッセージ」を作ることになった。内容や方法は、各自自由とし生徒の責任の範囲に任せた。大半の生徒は、原稿用紙数枚にこれまでの活動の中から、後輩が活動していく中で起こりそうな困難の紹介とその克服策、あるいは、最も効果的な調査研究の仕方などをまとめてきた。また、水質などを測定する機器を用いての調査の仕方をVTRに記録したり、今までの調査研究をデータ・ベース化したり、環境保全のコントをVTRに記録したり、自分の研究の成果をフロッピー・ディスクにしたりして、自分の得意にしたい分野で作成してきた。その後、それらの紹介とVTRの発表会を行い、それぞれの作品の共有化を図った。

③カップルは2年4組ばかり

いくつかのカップルが職員間で話題に上がった。その中で中心は、同学年同士でつき合っているカップルは、「見通しの輪」を経験した筆者のクラス出身者が大半を占めているということであった。これについて、同僚教師たちから多くの苦言を頂くことになった。男女間が良い意味で近づくことはとても好ましいことであると思うのであるが、学校社会の中で理解されにくい点が多々あったのはちょっと残念であった。

(4)S君の「後輩へのメッセージ」

小学校の時よりスイミングスクールに通い、ほとんど毎日が練習で夜の自由時間がないS君は、どちらかというと、同じ中学生より大人の世界を知っていてか言動がちょっと気になる生徒である。これまで余り意識して見ていなかったS君であるが、本実践の活動中、グループでの話し合いがとても楽しそうに見え、その話の内容がとても興味深く聞こえた。日が経つにつれ、クラス全体に発言するようになり、その度にその建設的な意見がクラスメートから注目されるようになっていった。中学3年になりS君が、例えば、体育祭、晩祭などの実行委員などいろいろな行事において、今までの彼にない全体を見渡したリーダーシップを取っている様子が見られた。

そのS君は、卒業間近の「後輩へのメッセージ」にレポート用紙5枚にわたるレポートを提出してきた。全文は伝えられないが、その一部を紹介したい。

・本校の地域環境学習は面倒であったが、一生懸命考え、行動し、まとめ発表できたことは無駄にならないでしょう。

・この学習は環境に限らず、自分自身を大きく前進させることにつながると思う。それは、発表の力が付いたことや、積極的な考えや行動をとるようになったこと。そして、一つのことを頑張る人は、どんなことでも頑張ると思う。だから、今回の活動はとても大切なことだと思っている。

・イチローの作文は、自分の夢を語りそのための具体策を語っている。環境についても同じであり、環境をどうしたいのかを考え、そのために何をしなければいけないかを考えることが大切である。(環境面について、小学校卒業にあたってのイチローの作文を例に述べている。)

・「見通しの輪」は、良いところと悪いところがはっきり見えてくるので、ふだんの生活にも使える。

・環境に関して、自分には解決が付かない問題や課題が多くある。それらの多くは、僕たち人間が引き起こしてきた。解決するのも僕たち人間だ。

・そして、「僕は、『環境問題に対しての最善の策』そんなものはないと思う。なぜなら、自分たちで考え出した解決策で満足せず、さらに良いもの、さらに良いものを作り出していかなくてはならないと思うから。その様に、前向きに考えていくことが、『きれいな霞ヶ浦町』ひいては『きれいな地球』につながっていくと思う。」

このレポート作成後のS君との会話で、「自分のグレードが少しずつアップすれば、それなりの解決策が考えられる。だから、環境問題に対しての最善の策はないと思う。しかし、今中学生の僕にできることはある」と言う。まさに、現在の社会問題解決に対する考え方を言っているようであった。

以上、紹介してきた生徒は優等生ばかりでなく、テストの得点で言えば、高得点をとらない生徒が多かった。結局こうした生徒の変容を見ると、大半の生徒にとって幼稚園からの約十年間の授業の中で、自分よりテストの得点で優秀な生徒がいつでも存在し、自分を生かす機会が見つけれず、活動意欲が制限されていたのではないかと思われる。

4. 「学びの共同体」の成立と学校生活の活性化

意思決定に重点を置いて行ってきた本校環境学習は、意思決定ツールとしての「見通しの輪」を導入したことにより、調査を基にした解決策の提案から行動化にまで至り、生徒たちの家庭まで巻き込み生徒たちの環境意識が高まった⁶⁾。

しかし、そればかりでなく、生徒一人ひとりがテストの得点に関係なく「自分の考え」を表現し、その表現に耳を傾け「分かり合う」という「みんなの学び合いに、自分も自分らしさを発揮しつつ参加した。」そして、自分自身「なってよかった自分」になれたと同時に、学級・学校に「よいもの」を遺し、学級・学校全体が「よりよくなる」ことに参加、貢献できたのである。

このことは、佐伯等の言う「学びの共同体」⁷⁾が成立した、と言ってよい。それは、佐伯が「学びとは、『学びがいのある世界を求めて少しずつ経験の世界をひろげていく自分探しの旅』であり、希望をもって生きるということである。」、また、「人はつねに、他者とともに学ぶ存在である。」と述べているからである⁸⁾。

その「共同体」なるものが独立して存在しているわけではなく、いくつもの共同体が重層的に関連付いており、今回だけの共同体でそうした効果が現れたとは言いきれない。しかし、その共同体に今まで以上の信頼関係が育ち、学校の活性化のきっかけになったことは事実である。

これは、「見通しの輪」の持つ意思決定ツールとしての機能以外の特性によるものと思われる。それは、まず正解がないため誰でも意見が述べられ、聞いてもらえたこと。次に、学業成績よりむしろ豊かな生活経験を持つ者の意見の方が他の生徒にとって説得力をもち、他の生徒から注目を浴びること。さらに、作成するもの発表するものも容易であったこと等々の特性である。それらの特性が、相手を再確認し、また相手に再認識させ、前述した様々な変容（エピソード）を成立させ、「学びの共同体」の成立に大きく貢献したのではないかと思われる。

結語

このような「見通しの輪」を地域環境学習に導入したことにより、前述した様々な効果があり、「学びの共同体」が学校の中に成立する契機となった。結局、学校教育を活性化することができた。

しかし、生徒の「学び」ばかりでなく、教師同士も「YOU」的關係、つまり互いの意図を了解しあう相互に親密な関係になり⁹⁾、「学びの共同体」が成立した。言い換えれば、教師同士が実践的研究を進め自分の力量を形成するには欠くことができない「教師の同僚性」が高まった。ここで言う「同僚性」は、「同じ勤務校で同僚教員が連帯すること」である¹⁰⁾。

そうした中、教師は情報を一方的に「与える」者ではなく、子どもの「自分探し」につきあい、それを文化的実践に関係付ける役割をもっていること気づき始めた。それは、本校が生徒の活動を制限しようとする事のほうが多かった学校から、生徒の可能性を支援しようとする学校に変わってきたことから言える。

最後に、筆者を含めた教師が生徒より先に「YOU」的關係になろうと努力すれば、現在の学校教育で生じている様々な問題は、改善の方向に向かうのではないだろうか。少なくとも筆者の勤務する学校では、生徒も教師も少しずつ双方向的に「なってみたい私」になろうとしている。

註

- 1) 文部省『環境教育指導資料（中学校・高等学校編）』，大蔵省印刷局，1991
文部省『環境教育指導資料（事例編）』，大蔵省印刷局，1995
- 2) 川島則夫，長洲南海男「身近な地域の霞ヶ浦の水環境汚染を事例とした環境教育の開発－STSアプローチに基づいて－」1994，第44回理科教育学会全国大会発表資料
- 3) 佐藤 学 「『学び』から逃走する子どもたち」，『世界』，1998，1，pp. 63－72
- 4) 日本児童教育振興財団『環境教育実践マニュアル』，小学館，1995
- 5) Piel, E. J. , Decision-Making: A Goal of STS, in: Yager , R. (ed.), *What research says to the science teacher*, vol.7, 1993 , pp.147-152
- 6) 今村哲史，川島則夫，長洲南海男「『霞ヶ浦周辺の水環境保全』を題材とした中学校環境教育の展開－STSアプローチに基づいた生徒の意思決定指導により－」，『世界湖沼会議論文』，1995， p. 3
- 7) 佐伯 胖 『『学ぶ』ということの意味』，岩波書店，1995， p.147
- 8) 同上書， p. 11， p. 44
- 9) 同上書， pp. 65－78
- 10) 今津孝次郎『変動社会の教師教育』名古屋大学出版会，1996，1， p. 323